

## ひきこもり、そのとき家族は

臨床心理士

榎場 雅子

「ひきこもり」については、狭義な意味での精神疾患とは区別され、青年期特有の心理病理的な問題に加えて、社会病理的な問題が関与して、二次的に表出した問題群と紹介しました（6月号）。

青年の多くは、程度と期間の差はあっても、成長の過程で交々の苦衷を経験、自らそれを克服し、大人になってから、甘酸っぱい思い出として語られます。

ところが、この間にも電話相談には、今現在ひきこもり状態にある若者を抱えている家族からの相談が続出しました。特に編集後記〈市民のまなざし〉において、hが記している、日本の家族の閉鎖性と心理的父親の不在、矢面に立つ母親の苦悩、子ども社会の人間関係の希薄さ、大人社会の相互支援の希薄さに対する共感と、それらをわが身に重ねての相談が相次ぎました。

言うまでもなく、青年期とは子どもから大人に移るまでの期間を指します。親への依存から離れ、社会の中へ自分の足で踏み出すまでの過程です。親の指示や価値観ではなく、自分の力で、あるべき自分の姿を作り出そうとして、親からの離脱を試みます。

しかし、大人社会で一人前と認められるためには、それなりの知識を身につけ、それなりの技能を体得しなければなりません。更に、自分のあるべき姿を確立するのは容易なことではありません。現代日本の社会は、青年期後期の若者に、大人になるために、モラトリアと呼ぶ猶予期間を与えています。片や、青年期前期を思春期と呼び、体の発達からみた移行期を表します。性ホルモンの増加による急激な成熟がみられます。ところが、社会心理的成熟はこれに追いつかず、体と精神の発達にアンバランスの状態が続き、性的あるいは攻撃的衝動が高まります。その衝動を受け入れながら、社会からの課題を達成しなければならず、心理的に不安定となり、その混乱はそのまま行動としてあらわれ、家庭内暴力、不登校、いじめ、非行などをひき起こします。

その時、親は子どもの変動に驚いてしまいます。従順だった子どもが反乱を起こしたと思って、「今までの苦労は無駄だった」と嘆き、「裏切られた」と怒り、遂には沈み込んでしまいます。子どもの行動に危機が起きたと認めない親もいます。自分が不安に支配されたくないからです。子どもの行動を無視したり、大丈夫だと思い込もうとします。時には、配偶者に責任を押しつけ、夫婦不和を招くこともあります。こういう親の弱さを子どもは訴えているのです。

親が事態と真向い、同時に自分自身と向きあうことで、子どもの行動の意味するものを知る一端となります。或は精神疾患の初期症状ではないかと思われる状態であっても、両親の冷静な判断と行動化、（精神科医に相談するなど）温かい受入れと支援によって、困難を克服し更なる成長した青年も少なくありません。前々回の「自分さがしのとき」も前回の「モラトリアムからの立ち上がり」もこれに当たります。範に垂れると言ってよいでしょう。

ひるがえって、「ひきこもり」に代表される今日的な社会問題をオブラートに包んだ形で、安易に済まそうとは思いません。電話相談の中での、母親の切実な声にも、社会的ニーズにも応えるべく、「ひきこもり、そのとき家族は」と題して、問題を考えたいと思います。

もう、30年も前になります。父親が中学生の息子を金属バットで殴殺した事件がありました。幼い頃から、気弱でおとなしかった息子は、中学1年の秋頃から母親に暴力を振るうようになり、

姉にも被害が及び、母娘は家を出て、別居しました。毎朝おこしてくれていた母親がいなくなり、息子は登校時間に遅れることが多くなり、遂に不登校状態に陥ってしまいました。

これを知った父親は、「これからは自分が子どもの面倒を見よう」と決心して、仕事も辞めて、家事から身の回り一切の世話まで、母親の代わりにべったりと寄り添っていました。

事件前日のこと、息子は指定のブランドのTシャツを買いに行かせ、指示した色合いが違うと、いきなり父親の顎を掃除機のホースの先で殴りつけました。事件の当日、父親が聞きなれない名を言ってビデオを借りに行かせました。借りてきたビデオをみて「誰がこんなものを借りてこい、と言ったか」と怒鳴り投げつけました。一瞬、放心状態になった父親は、そこにあった金属バットで息子を殴りつけ、遂に殺してしまいました。

裁判の時、父親は「自分のした事は覚えているが、何故そんなことをしたかわからない」と言い、精神鑑定に当たった精神科医は「健忘を伴わない人格解離」と診断しました。解り易く言えば一過性の不完全、多重人格と説明しています。

一方、妻は「夫が息子を殺していなければ、私が息子を殺していたかもしれません」と証言し、夫は、この場に至っても「妻がそこまで追い詰められているとは知らなかった。年頃の娘は女親が見るべきで、息子は男親の私が見るべきと考えた」と言っています。

この事件、どう思いますか？ 30年も前のことですが、世の多くの父親達に衝撃を与えました。温厚な父親が、何故、あそこまで追いつめられたのか。そもそも、気弱でおとなしかった子どもが何故、あんなふうなってしまったのか？ **父親はどうあるべきだったのか？**

この事件の怖さは、特殊の家庭のことでも、崩壊した家庭でもない、というところにあります。問題の萌芽は、日常の親子の関係、家族の関係の中から醸成されているということです。

専門家の間でも、このことについては、真剣に意見が交わされ、30余年来精神科の臨床医として名だたる齊藤学氏をして、「母性化時代の父の役割」との問題を投げかけられました。それは今も、生き続けています。というより、現代社会を象徴する言葉となり、課題ともなっています。

ならば、どんな父になればよいのか？ 父性性とは何か？ こんな重い問いに迷っていたときに、NHK短歌の入選歌の中から、

・**優しくて 怖くて弱く 強い母 母はいつでも 大きな神話** という、一首を見つけました。

この歌の母をそのまま父に詠みかえられますか？ 世のお父さんへ。

### 〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時 (11月19日は休みます。)

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈市民のまなざし〉 ★「ひきこもり」問題に苦悩する家族が少なくありません。放任し、拱いているだけでは問題を長期化、深刻化させてしまう、と憂慮する筆者。きっと30年前の悲劇が頭をかすめているに違いありません。★我孫子市内だけでも「ひきこもり」の若者は200名以上、家族や外部との接触が少なく、不登校、さらに働くこともなく、自宅に引きこもるだけの不毛な生活、その先にどんな未来があるのでしょうか。★「ひきこもり」という困難な問題に安直な特効薬などありません。筆者の言うように、本人を含めた家族がこの問題に真剣に向きあい、父親は父親らしい役割を果たす、必要なら教師や専門医に相談し適切な処方箋を求める、その時始めて解決の糸口が見つかるのでしょうか。家族の自治能力が問われているのです(h)。